【脇田太裕先生抄録】

【天然歯の形態学】

天然歯形態は千差万別だが基本的なルールは存在する。しかし全てが当てはまるわけではないがそこが天然歯らしいとも言える。

歯牙形態については解剖学から始まり歯牙形態を分類し、特徴を分析しルール化されている。いつでも諸先生の本や論文で見ることができた。ところが、残念ながら当時の本は絶版となり、これから勉強する人たちは手に入れることが難しい。しかし、歯牙形態は不変で色あせることはない。筆者は毎年、新しい生徒とかかわる機会も多く、伝える難しさも実感している。

今回、歯牙形態の見方や捉え方についてまとめたが、歯牙形態を正しく表現するために正しく見る目と正しく捉えることができる方法を体得することが、表現するための第一歩だと考える。

テーマは２つある。１つは「流れ」である。切縁から根尖側、隆線、咬頭、の流れを見ることでどのような機能を果たしているかがわかる。
もう１つは「バランス」である。各流れが近心と遠心や唇頬側と舌側との対比(バランス)を見ることで形態の大半が決まってしまう。

補綴装置が人体の一部になるということは工業的ではなく自然界(生物的)で機能、共存し調和するためにはそこに自然観が必要になる。天然歯形態を理解していると口腔内で機能する補綴装置を制作できる 一助になることは間違いない。特に CAD/CAM によるデジタルデザインにも応用することができる。先に述べた各方向から形態を理解していれば画面上においても明確なイメージからデザインすることができる。良くないのはデザインしながら探すことで、明確なイメージからのすり合わせが大切なことである。

今回、これはハイジニストの方々にも形態をより理解していただけるのではないかと考えている。隣接面の形態による清掃性にも焦点を当てた。隣接面の形態は非常に微妙な変化だがその形態が及ぼす清掃性について参考になる部分を見出していただければ幸いです。さらに、歯科医師の先生の方々には歯牙形態にあった支台歯形成やダイレクトボンディングなど、形態に対するイメージが明確であればより各行程での一助になれば幸いです。